

## 投稿のすすめ

近畿双松会第十代会長 徳田完二 (24期)

このホームページでは自由投稿を随時受け付けており、これまでいろいろな投稿がありました。近畿双松会への関わり方は、総会・懇親会や各種行事への参加だけではなく、ホームページに投稿するという形もあります。少しでも多くの会員に、近況の紹介や、日ごろ思っていること、印象に残った出来事、思い出話などを、気軽に書いていただければと思っています。そういうものをホームページ上に持ち寄ることは、会員同士の間接的な交流になるでしょう。

しかし残念なことに、これまでは投稿者が比較的限られていました。このたび会長をお引き受けしたのを機に、投稿者をもっと増やせないものかと考えました。

そこでまず、「隼より始めよ」というわけで、私自身が積極的に投稿し、連載の形でミニエッセイを書くことにしました。私と北高の関わりを書いた第一弾はすでに投稿済みです。ご笑読ください。

さらに、会員のみなさまの、文章を書こうという意欲をいくらかでも刺激することになればと願い、次に掲げたような文章を書いてみました。これを読み、「自分も何か書いてみようかな」という気持ちになっていただければ嬉しいと思います。

### 文章を書く時のヒント——私の“執筆作法”から

#### 1. はじめに

私は若いころから文章を書くのが好きである。学生時代には親しい友人たちと同人誌もどきの小冊子を作り、小説らしきものやエッセイらしきものを書いてうれしがっていた。大学教員になってからは論文を書いたし、それよりも柔らかいエッセイ風の文章も書いた。学生の書いた文章をチェックしたり評価したりする仕事もした。そんなこともあって、文筆業ではないけれど文章を書くことについては自分なりに考えるところがある。

私は誰かから文章の書き方を直接教わったことはなく、いつの間にかできあがった自分なりの流儀で書いてきた。ただ、作家や新聞記者の手になる『文章読本』『作文技術』の類を学生時代に何冊か読んだことはある。その内容はおおかた忘れてしまったが、知らず知らずのうちに取り入れているものがあるかもしれない。

以下では、主にエッセイを書く時のヒントになりそうなことを記そうと思う。大したことを書くわけではない。自分はこの風に考えている、こんな風にやってきたという「自分流」を披露するだけである。

ゆきあたりばったり書いていくので、まとまったものにはならないが、その中に一つでも「これは参考になる」と思っていただけのものであればうれしい。

## 2. 何を書くか

もう故人になってしまったが、私が敬愛する精神科医に中井久夫先生（神戸大学名誉教授）という方がおられた。先生は専門領域における膨大な論文のほかにたくさんのエッセイもお書きになった。先生の著作には、文章を書くことに関するご自身の考え方や、書く時の流儀を紹介したエッセイもあって、その中に印象に残っている言葉がある。それは「心踊りのしない文章は書くな」という教えである。これは中井先生ご自身の言葉ではなく、先生が尊敬する方から教わったものだという。

その教えを読んで、なるほど、と思った。「心躍り」とは、読み手ではなく書き手のそれを指している。だから、先の言葉は「文章を書くなら、自分が楽しみながら書けるものを書け」という意味だと私は受け取った。嫌々、渋々書いても書き手は面白くない。おそらく読み手にとってもそうだろう。

しかし、自分が楽しみながらエッセイを書こうとしても、それにふさわしい題材がごろごろ転がっているとは限らない。ごく普通の生活をしている人のまわりにあるのはたいてい「ごくありふれたささやかな出来事」だからである。だとすれば、多くの人にとって「心躍り」のするエッセイを書けるチャンスはあまりないのだろうか？

必ずしもそうではないと思う。「感動的な話」や「大傑作な話」だけが「心躍り」のするものとは限らないからである。ありふれたささやかなことでも、見方によっては面白いと感ぜられるかもしれない。何かを書こうとする時に大切なのは、人の耳目を驚かすような出来事や経験を探すことではなく、ありふれたささやかなことを「あらためて見直す」ことによって、そこに「何かしら面白味を見出す」ことではないか。あるいは、何気ないことを「ちょっと面白い視点から見てみる」というようなことではないか。中井先生を通じて知った「心踊りのしない文章は書くな」という教えから、私はそんなふうを考えている。

このことをたとえ話で言うなら、人が普通に歩いている様子を横から見ても別にどうと言うことはないが、真上から眺めてみるとちょっと面白いかもしれない、と気づくようなことである。つまり、面白味のある文章を書くために、「ことさら面白い歩き方をする人」を探すようなことは必要ない。

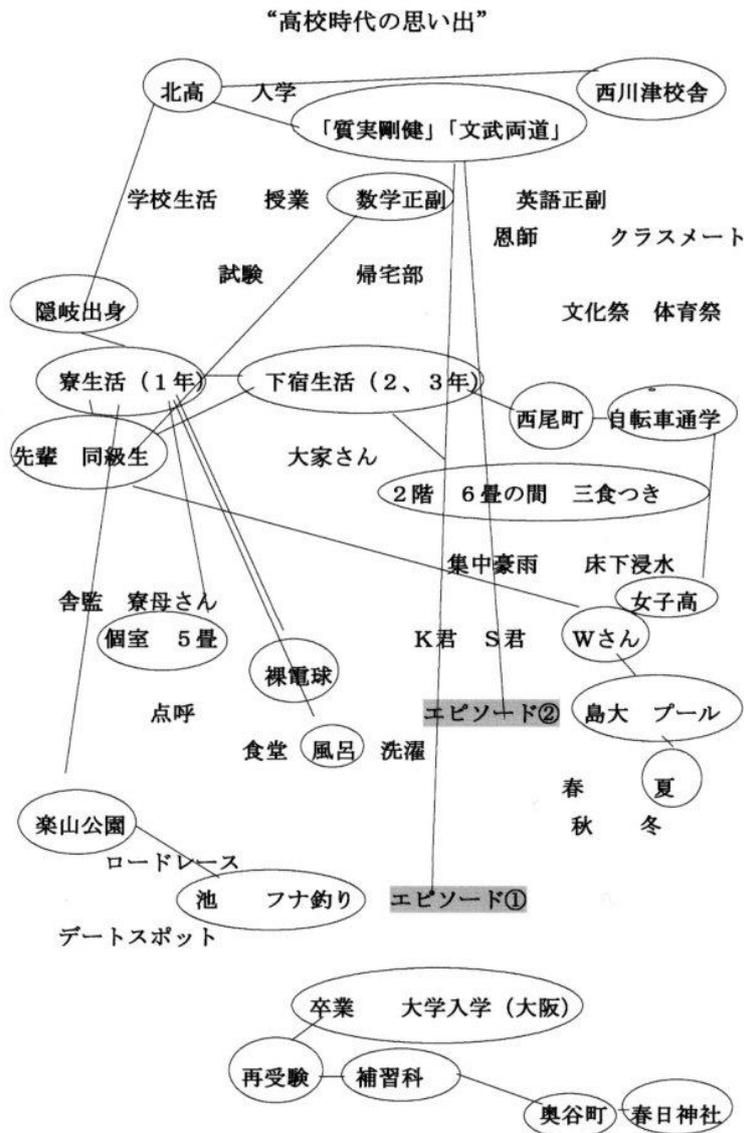
いずれにしても、何か書く時には自分が面白いと感じることが肝心だろう。私がこの文章を書くのはそれが自分にとって面白いからである。

## 3. アイデアを生み出す方法

アイデアを生み出す方法として「ブレイン・ストーミング」というものがある。これは要するに、まずは思いつくことを思いつくまどどん書き出してゆき、最終的にそれをまとめる方法であり、文章に何を書くかを考える時にも使える。これには決まったルールがあるわけで

はないが、コツとしては「頭の中で考えるだけではなく、文字として書き出す」「浮かんだアイデアのよしあしを考えないでとにかく書き出してみる」「普通の文章や箇条書きの形ではなく、単語や語句の形で書く」「二次元平面に広く散らばらせて書く」などだろうか。また、自分にさえわかればよいので、難しく考える必要はない。

二次元平面に広く散らばらせて書くメリットは、書き出したことから同士のつながりを見つけやすいことである。これにより、初めは断片に過ぎなかったものがつながり、まとまりを見つけやすくなる（次の図参照）。



ついでに言えば、エッセイを書く時は、自分自身の個人的な経験（エピソード）を適宜具体的に書きこむのがよいだろう。個人的な経験に関わる「記憶」は脳の中で「感情」と結びつきやすいため、書き手の「気持ち」がうかがえる文章になりやすいからである。そして、そのような文章は読み手の関心を引きやすいと思う。

#### 4. 自分の中に「読み手（＝第三者）」の目を持つ

日記を書くことと、人に読んでもらう文章を書くとはかなり違う。書く「内容」だけではなく、書く時の「視点や姿勢」が違うのである。

書き手が自分の経験を書く時、書き手と読み手の間には大きな溝がある。書き手はこれから自分が書こうとすることを「すでに全部知っている」が、読み手の方はこれから自分が読もうとする文章の中身を「まだ何も知らない」。このように、書き手と読み手は別々の「地平」に立っている。人に読んでもらう文章を書く時にはこの点をわきまえることが重要だと思う。つまり書き手は、読み手が予備情報を何も持たないところから自分の文章を読み始めるという、あたりまえのことを自覚しながら書く必要がある。

文章を書き慣れていない人は、自分が何をどう書くかを考えるのに手一杯で、読み手にどう見えるかにまで気が回らないかもしれない。これに対し、書き慣れている人は読み手のことを頭のどこかで意識しながら書くのではなからうか。たとえば、「こんな言い方で（あるいは、こんな話の順序で）すっとわかってもらえるかな」「これにはちょっと説明がいるかな」「こんな風書いたら興味を持ってもらえるかな」——そんなことを頭の片隅でちらちら考えながら書くのではないかと思う。それは「読み手を意識する自分を持つこと」とも「自分の中に読み手の視点を持つこと」とも言える。あるいは「他者の目で眺めつつ書くこと」と言ってもよい。

自分が書きたいことだけを考えて一生懸命書き進めたら、人が感心するようなすばらしい文章ができた、というようなこともまれにはあるかもしれないが、それはまぐれのようなものだろう。一般的には、上に書いたような視点を持てるかどうか、よい文章を書くための条件だと私は考えている。

ここまで書いてきて、ふと思い出したことがある。それは大学時代の友人の父君のことである。彼はある分野のすぐれた芸術家で、とても温厚な好人物だったのだが、ちょっと変わったところがあった。

ある時、父君に郵便局で何かを受け取らなければならない用事ができた。それで、わたしの友人である彼の息子と一緒に郵便局へ行っただけである。対応した局員から「運転免許証とか健康保険証とか、本人であることを証明するものはありますか？」と聞かれたのに対し、父君は怪訝な顔をして「わたしが〇〇（父君の名前）なんです」と言っただけ。つまり、父君にとって自分が〇〇であることはあまりにも自明であり、証明するまでもないことなのだった。そしてまた、自分には自明なことでも赤の他人である局員にとってはそうでないというあたり前の事情が飲み込めなかったのである。

局員が身分証明になるものの提示を再度求めたところ、父君はじれったそうに、「ですからね、わたしが〇〇なんですよ…それで…これがわたしの息子です」と、私の友人を指さしたと言う。

私は友人からその話を聞いた時、局員の困惑ぶりが目に浮かぶようで、大笑いしてしまった。父君には申し訳ないと思いつつ。

話を元に戻そう。自分が書こうとしていることを読み手はまだ何も知らない。そうわきまえながら書くことが、よい文章を書く秘訣の一つ、というより必須条件だろう。自分の中に「他者の目」を持つには、そのような目を頭の中に想定しつつ文章を書く経験をたくさん積むことだと思う。

## 5. 説明と描写

何かを言葉で書く方法は、大まかに「説明的な書き方」と「描写的な書き方」に分けられると思う（これらの言葉は私なりに思いついたものであるが）。この分類は絶対的なものではなく相対的なものとするのがよい。これら二通りの書き方を以下では単に「説明」「描写」ということにする。

では、説明や描写とはどんなものか。具体例をあげよう。若いころ私は、山陰線鈍行夜行列車の中で重要書類の入ったカバンを盗まれた経験がある。さっきたまたまそれを思い出したので、ここで題材にしようと思う。列車を降りようと網棚のカバンを取ろうとした時のことを書いてみる。

A 私は網棚にカバンがないのに気づいて驚いた。

これはその時のことを単に説明しただけの文である。同じことでも次のように書くとだいぶ印象が違おうだろう。

B 私はカバンを降ろそうと網棚を見上げ、わが目を疑った。

（ない…！）

そこにあるはずのカバンが見あたらないのだ。

言うまでもなく、A が説明、B が描写である。Bの方がその時の状況（とくに私が感じた驚きや困惑）を生き生きと伝えられるだろう。文章を書くコツの一つは説明と描写をうまく使い分けることだと思う。

ついでに言うと、描写では上のように具体的なセリフを適宜使うと効果的である（ただし、上の例は「心の中のセリフ」だが）。ひとことで言うと、描写とは読み手が場面を思い浮かべられるよう工夫した書き方である。

もう一つ例をあげよう。

向こうから美しい女性が近づいてきた。

これも説明である。読み手は女性が「美しいらしい」ことを頭で理解できるだけで、「たしかに美しい」とは感じないだろう。「とても」「びっくりするほど」「今まで見たこともないような」などと、美しさを強調する言葉をいくらつけ足してもそれは変わらない。「その女性は美しいという書き手の判断」ではなく「その女性の美しさそのもの」を読み手に伝えたいなら、それを描写しなければならない。次はその例である。

向こうからすらりとした女性が近づいてきた。髪が肩まで垂れ、目が切れ長で、品のよい顔立ちはハッとするほど私の目を引いた。

こちらは、読み手が女性のスタイルや顔立ちを具体的に浮かべやすいだろう。どの程度の具体性が適切かはケースバイケースだが、詳しくすぎる描写はかえって人や物の姿かたちを思い描きにくくする可能性があるので注意した方がよいと思う。なぜなら、そのような描写は説明に近づいてしまうかもしれないからである。たとえば次のように。

向こうからすらりとした女性が歩いてきた。身長は百六十センチ台半ばくらいだろうか。このごろの若い女性としては普通の背丈に見えた。彼女は髪が長く、肩から十センチほど下まで垂れていた。それは縮れのないさらりとした直毛で、艶があり、茶髪などに染めていないため、濡れたように黒々と光っていた。切れ長の目は、目立たないマスカラをつけているようにも見えたが、もしかしたら本物のまつ毛だったのかもしれない。全体にメイクは控えめだった。それなのに、彼女の顔立ちは私の目を引いた。

このように、いろいろな部分々々を詳しく書くのがよい描写になるとは限らない。ただし、説明としてなら上記の文章も悪くないかもしれない。いずれにしても、いろいろな書き方を自分なりに試してみるのが文章上達のコツだろう。

## 6. 文章のリズム

文章にはリズムというものがある。それを意識して書くことをお勧めしたい。一般的には、長めの文と短めの文を適度に混ぜるのがよいだろう。短めの文ばかり続けるとぶつぶつ切れる感じがするし、長めの文が続くと読む方はうんざりする。これについては、短歌が五七五七七七という長短のリズムをバランスよく配列してあることを思い浮かべるとよいかもしれない。短めの文ばかり続く文章は五五五五のリズムで詠んだ短歌、長めの文ばかり続く文章は七七七七のリズムで詠んだ短歌のようなものではなからうか。

文章のリズムを感じとるには頭の中で音声化して読むのがよいだろう。目で文字を追うだけではリズムがわかりにくいからである。

ついでに言えば、文章のリズムに関わることで「体言止め」という書き方がある。これを効果的に使うと引き締まったリズム感を生み出すが、多用は避けるのがよいと思う。それについては、名詞で終わる句ばかりの短歌がどんな印象を与えるかを想像してみるとよいだろう。

試しにこの節の冒頭部分を例に体言止めを「乱用」してみると、たとえば次のようになる。

文章の重要な要素の一つはリズム。そのことを意識して書くのがお勧め。望ましいのは長めの文と短めの文の適度の混合（ただし、これは一般論）。短めの文ばかり続いた場合の印象はぶつぶつ切れる感じ。長めの文が続く場合に感じられるのはうんざり感。これに関して思い浮かべるとよいのは短歌。目を向けるべきは五七五七七という長短のリズムのバランス。

文章のリズムを感じるのによい方法は頭の中での音声化。その理由は、目で文字を追うだけではリズムがわかりにくいこと。

これは極端すぎる例だが、過剰な体言止めは、文章が少しくだけた感じがすることや、あまり品がない印象を与えかねないおそれのあることが感じ取れるのではなかろうか。

ちなみに、私が中三の時、国語の教科書に『奥の細道』が載っていて、冒頭の二ページほどを暗唱する課題が出された。その部分をすらすら言えるようになるまで何度も何度も口にしたことで、芭蕉流のリズムがからだにしみ込んだような気がした。端正かつ滑らかで、適度の変化がある長短のリズムは心地よかった。その経験が自分の文章のリズムに影響しているような気がしている。

## 7. 文章における時系列と時制

エッセイを書く時、複数のエピソードをどの順序で提示するかという問題が起きることがある。エピソードには時間的な前後関係があるのだから、それが無理なく伝わるように書くことが望ましい。そうでなければ、読み手は混乱する可能性がある。

多くの場合、書き手は時系列に沿った形でエピソードを提示するだろうし、読み手の方は、特に断わりがなければ書いてある順序通りにものごとが起こったと受け取るだろう。その一方、いくつかのエピソードをあえて時系列に沿わない順序で示すことも当然あり得る。たとえば、あるエピソードを特に強調したい場合などである。そのような場合には、あるエピソードを書いた後、それより前のことに触れるなら「〇〇より半月ほど前に□□があった」などの説明が必要だが、その説明抜きでエピソードの時系列を逆にした文章を見かけることがある。それは「書き手にはどういう順序だったかが自明であっても、読み手にとってはそうではない」（4節参照）ということを書き手がしっかり意識していないからではなかろうか。

ついでに言うと、時系列に沿ってエピソードを提示する場合でも、あるエピソードと次のエピソードの間にどれくらい時間的間隔があったのかがわかるように書くのがよいだろう。半月ほどあいているのか三年ほどあいているのかでは、だいぶ意味が違うかもしれないからである。

そもそも、読み手にとっては何事によらず具体的な説明がある方が状況をイメージしやすいものである。厳密な正確さが必要なことは多くないだろうが、「おおよそのことが思い浮

かぶ程度の具体性」があると、読み手が具体的かつ的確に理解する助けになる。たとえば、「その人はすぐに帰ってしまった」よりも「その人は二分も経たないうちに帰ってしまった」の方が、読み手は状況をクリアに思い浮かべることができると思う。

時間に関わってもう一つ言うと、過去のことを書くからと言って、すべての文を過去形にする必要はない。過去の出来事を述べながらも、それを書いている今、心に浮かぶ考えや気持ちは現在のことなので、それは現在形で書くことになる。たとえば、「〇〇があった。それから、××があった。おまけに△△だった。それは今思い出しても□□である」などのように。

なお、過去形ばかり続くのではなく、過去形の中にとときどき現在形が混じるのは、文末が単調になるのを避けるという点からも望ましいことがある（この点については11節で詳しく述べる）。

## 8. 文の区切りについて

紙やパソコンのディスプレイに書き出す以前の「頭の中にある考え」は、必ずしもきちんとした文にはなっていない。きちんと整った言葉が頭に浮かぶこともたまにはあるだろうが、それはおおむね「語句」か「短い文」であり、「長い文」や「段落」の形にはなっていないのが普通だと思う。だから、文章を書く作業というのは「曖昧なものを含んだ言葉のかたまりや、言葉以前のモヤモヤしたもの」を明確な言葉として区切り、配列するようなものだと言えよう。

「書きたいことは決まっているのだが、どうもうまく書けない」「書くには書いたが、どうもしっくりこない」といったもどかしさを感じた経験は多くの人にあるのではなかろうか。そんな状況から抜け出す特効薬的な手立ては思いつかないが、経験上、試してみる価値のある方法がある。それは文の区切りを変えてみるというものである。

先ほど、文章を書くとは「曖昧なものを含んだ言葉のかたまりや、言葉以前のモヤモヤしたもの」を明確な言葉として区切り、配列するようなもの」を明確な言葉として区切り、配列するようなものだと言った。これは、裏を返せば、もともと頭の中にあったものには切れ目がなかったということである。つまり、そもそも切れ目のないモヤモヤしたかたまりを強いて区切り（少し難しい言い方をすれば「分節化」し）、紡ぎ出すのが文章というものだろう。だから、どうもうまく書けないという袋小路に迷い込んだら、文の区切り方を変えてみるとよい場合がある。

だいたいできあがっている文章にどうも満足できない…あれこれ言い回しを変えてみるのだが、しっくりこない…何とかならないものか…そんな風を感じる時、私たちは「すでにできている文章の構造」に縛られ、その構造の範囲内で何とか修正しようとする傾向があるのではないか。そして、その傾向の背景にあるのは「せっかくできたものを壊したくない」

という心理だと思う。文の区切り方を変えるには、その束縛から逃れる必要がある。

ここで、前節の冒頭部分を例として、修正する前と後の文章を以下に示す。私としては修正する前の文章が不満だったので、文の区切り方を変えてみたものである。どう修正したかがわかりやすいよう、文ごとに行を改めて書く。また、修正後に文の区切りが変わった箇所に「/」を入れた。ただ、修正によって見違えるほどよくなったとも言えないので、文の区切り方はいろいろであり得ることを示す例と受け取っていただければよい。

複数のエピソードには時間的順序というものがあるわけで、それが無理なく伝わるように書かなければ/読み手は混乱するかもしれない。

↓

エピソードには時間的順序というものがあるのだから、それが無理なく伝わるように書くことが望ましい。そうでなければ、読み手は混乱する可能性がある。

いくつかのエピソードをあえて時系列に沿わない順序で示すことも当然あるが、/その場合には説明が必要である（たとえば、「それは〇〇より半月ほどあとのことだった」など）。

そういう説明抜きに時系列が「乱れている」文章を時々見かけるのは、/「書き手にはどういう順序だったかが自明であっても、読み手にとってはそうではない」ということを書き手が見落としているからだと思う。

↓

その一方、いくつかのエピソードをあえて時系列に沿わない順序で示すことも当然ある。たとえば、あるエピソードを特に強調したい場合などである。

そのような場合には、そのエピソードより前のことに触れるなら「〇〇より半月ほど前に□□があった」などの説明が必要なのだが、説明抜きでエピソードの時系列を逆にした文章を見かけることがある。

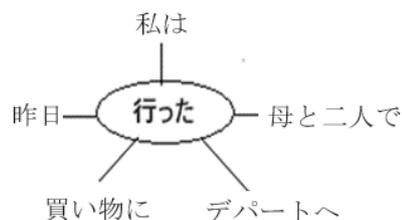
それは、「書き手にはどういう順序だったかが自明であっても、読み手にとってはそうではない」ということを書き手がしっかり意識していないからではなからうか。

## 9. 日本語の特徴を考えて書く（1） 述語中心ということ

日本語で文章を書く以上、日本語の特徴を知っておくに越したことはない。ここでは、私が文章を書く時に意識している日本語の特徴の一端について書こうと思う。

英語、ドイツ語などの欧米語が「主語 — 述語」（たとえば「私は — 行った」）という明確な構造を持っているのに対し、日本語はこのような構造があいまいである。そればかりか、日本語はそもそも主語というものを明確にはもっていない — そんな説を唱えている人がいるのを学生時代に知った（誰の説だったかは忘れたが）。その説によれば、日本語の特徴は次のようである（なお、以下で述べることは、むかし私が読んだ誰かの本の正確な再現ではなく、私なりに理解したことであるのをお断りしておく）。

日本語は述語を中心とした言葉で、文を構成するそれ以外の語はすべて述語について説明する（つまり、述語に係る）ものだと考えられる。このことを次の文で示す。



私は昨日母と二人でデパートへ買い物に行った。

この文を構成している「私は」「昨日」「母と二人で」「デパートへ」「買い物に」という言葉はすべて、「行った」という述語に係る。つまり、「わたしは…行った」「昨日…行った」「母と二人で…行った」「デパートへ…行った」「買い物に…行った」というわけである。これは右のように図示できる。

これらの言葉のうち「私は」は、文法上「主語」と呼ばれてはいるが、欧米語で言う主語とは違って、述語（＝行った）を説明する言葉の一つに過ぎず、文を成り立たせるために必須の要素ではない。別の言い方をすれば、それは文の中で特権的地位を有しているわけではない。その証拠に、前後関係から「行った」のが「私」であることが明白なら省略してもかまわない（もし欧米語でこんなことをすれば、不完全なセンテンスになる）。

また、「行った」に係るさまざまな語をどう配列するかについて、日本語はかなり自由度が高い。たとえば先の文を次のように書き変えてもあまり違和感はないだろう（もちろん、文としてのよしあしに違いはあり得るが）。

昨日私はデパートへ母と二人で買い物に行った。

昨日私はデパートへ買い物に母と二人で行った。

母と二人で私は昨日デパートへ買い物に行った。

このように語順がいろいろあり得ると、どの順序にすればいいか迷って困るという人もいるかもしれないが、逆にいろいろな語順をあれこれ試して楽しむ人もいるだろう。たとえば、「どの順番が一番わかりやすいか」「この語を強調するにはどの順序がいいか」などと考えたりして。このように言葉をあれこれいじる面白さを覚えることは、文章を書く楽しさにつながるかもしれない。

## 10. 日本語の特徴を考えて書く（2） 「私は」と書くか書かないか

前節で述べたように、日本語では主語が文を構成する必須の要素ではない。そうになると、主語を書くか書かないかを選択するという問題が生じる。たいていの日本人は、主語を省略した話し方をふだんからよくしているので、ものを書く時にも主語を書くか書かないかなど気にせず「自然に」書いている人が多いかもしれない。しかし、ここではあえて先述の問題について考えてみたい。エッセイの場合、主語は「私は」になることが多いであろうから、それを例にしよう。

この文章の1節の書き出しは次のようであった。

私は若いころから文章を書くのが好きである。学生時代には親しい友人たちと同人誌もどきの小冊子を作り、小説もどきやエッセイもどきを書いてうれしがっていた。大学教員になってからは論文を書いたし、論文より柔らかいエッセイ風の文章も書いた。また、学生の書いた文章を評価したりチェックしたりする仕事もした。文筆業ではないが、文章を書くことについては自分なりに考えるところがある。

私は誰かから文章の書き方を直接教わったことはない。いつの間にかできあがった流儀で書いてきた。ただ、『文章読本』『作文技術』の類を学生時代に何冊か読んだことはある。その内容はおおかた忘れてしまったが、知らず知らずのうちに取り入れているものがあるかもしれない。

上の文章で「私は」は各段落のはじめに一回ずつ使われているだけである。それ以外の文も主語はすべて「私は」なのだが、それは省略されている。ここで試しに「私は」を全部省略してみよう。

若いころから文章を書くのが好きである。学生時代には親しい友人たちと「同人誌もどき」の小冊子を作り、「小説もどき」や「エッセイもどき」を書いてうれしがっていた。大学教員になってからは論文を書いたし、論文より柔らかいエッセイ風の文章も書いた。また、学生の書いた文章を評価したりチェックしたりする仕事もした。文筆業ではないが、文章を書くことについては自分なりに考えるところがある。

誰かから文章の書き方を直接教わったことはない。いつの間にかできあがった流儀で書いてきた。ただ、『文章読本』『作文技術』の類を学生時代に何冊か読んだことはある。その内容はおおかた忘れてしまったが、知らず知らずのうちに取り入れているものがあるかもしれない。

これでも意味は通じるだろう。「いったい誰のことを書いているのか？」という疑問を持つ読み手はほとんどいないと思う。日本語の場合、「私は」は特に必要な場合に使い、そうでなければ省略するのが一般的習慣と考えてよいのではなかろうか。「私は」を書いた方がよいのは、たとえば「他の人はさておき、私は」というような意味で、自分を人から区別したり自分を際立たせたりしたい場合だと思う。

一方、主語が「私は」であるなら、それを文中に書き込んでも文法的にはもちろん問題がない。そこで、先ほどの引用箇所の前半をそのように書き換えてみよう。

私は若いころから文章を書くのが好きである。私は学生時代に親しい友人たちと同人誌もどきの小冊子を作り、小説らしきものやエッセイらしきものを書いてうれしがっていた。私は大学教員になってからは論文を書いたし、論文より柔らかいエッセイ風の文章も書いた。また、私は学生の書いた文章を評価したりチェックしたりする仕事もした。私は文筆業ではないが、

文章を書くことについて自分なりに考えるところがある。

これを読むと、多くの人が「くどい」と感じるのではないだろうか。「私は」が連発される文章を多くの日本人は好まないと思う。それは文法的な問題ではなく、強く自己主張をしたがらない国民性のためかもしれない。好みの問題もあるので一概には言えないが、「私は」という主語は控えめに使うのがよいだろう。

「私は」に関してもう一つ、複文に「私は」を書き込む場合、それをどこに置くかという問題もある。次の二つの文を見られたい。

私は文筆業ではないけれど、文章を書くことについては自分なりに考えるところがある。  
文筆業ではないけれど、私は文章を書くことについては自分なりに考えるところがある。

上のどちらがいいかの判断は理屈ではなく感覚的なもののような気がする。私は前後の文との関係やリズムなどを考えつつ「勘」で決めている。

### 1 1. 日本語の特徴を考えて書く (3) 述語が最後に来ること

述語中心ということに加えて、述語を最後に置くのが日本語の際立った特徴である。このため日本語ではその文章で何を伝えようとしているかが最後のところでようやく決まる（文末決定性）。たとえば、「私はあなたが好き…」まで聞いても、自分が相手から好かれているのかどうかはまだわからない。そのあとに「…ではありません」という言葉が続くかもしれないからである。欧米語なら、文の冒頭またはその近くに位置する主語の直後で肯定か否定かが示されるので、こういうことは起こらないだろう。

日本語の上記の特徴を生かせば、読み手に気を持たせたり、最後のところで読み手の予想や期待を裏切ったりするのを楽しむことができるかもしれない。しかし、それは頻繁に使う手ではないだろう。文章を書く上でもっと重要なのは次のことだと思う。

述語が最後に来るという特徴に関わり、文章を書く時に気をつけた方がよいこととして、日本語の文末が単調になりやすいという事実がある。なぜそうなるかと言えば、文末に来る述語はほとんど動詞か形容詞だからである。たとえば過去のことを言う場合には助詞の「た」がつくので、「行った」「思った」「うれしかった」などのように同じ音（「た」）が繰り返される（ただし、この特徴を生かして押韻的な効果を出せることもあるだろう）。文末が単調になるのを避けるためには、「～た」だけではなく、「～たのである」「～たのだ」などの言い回しを適度に混ぜ、バラエティを持たせるのがよいと思う。

ちなみに、欧米語では文末にさまざまな品詞が来るので、文末が単調になることは少ないだろうと思う。

述語が現在を表す場合はどうかというと、過去を示す「た」の連続ほど単調な感じにはなら

ない。しかし、述語が形容詞なら「～い」で終わり、動詞なら「～る」「～う」「～く」などの「ウ音」で終わるので、やはり単調な感じがしやすい。そのような場合には、「～い」「～いのだ」「～いのである」、「～る」「～るのだ」「～るのである」などの表現を適宜織り交ぜるのがよいだろう。

もちろん、同じ動詞が繰り返される時にはなおさら単調になる。たとえば「～と思う」が何回も続くような場合である。これを避けるには、「～と考える」「～という気がする」「～と判断する」など、「思う」の類義語をうまく使うのがよい。

ところが、書いている本人は文末が単調になっていることに案外気づきにくい。私自身、何度も読み返してようやく気づくことがある。文末の単調さに気づくための工夫としては、しばらく時間をおいてから読み直してみる、文章を目で追うだけではなく頭の中で音声化しながら読んでみる、ワープロソフトを使う場合なら文末の文字色を変えて文章を眺めてみる、などが考えられる。

ついでに言えば、述語に限らず言い回しのバラエティを豊かにすることは、よい文章を書くコツの一つだろう。つまり、同じ言葉を繰り返し使うのではなく、別の言い回しに替えるわけである。こういう点は英語などでは特に重視されるようである。

ただし、言い回しにバラエティをもたせたところで文章の内容自体がよくなるわけではない。だから、そのような工夫はあまり価値がないと考える向きもあるかもしれない。しかし、言葉には「形」というものがある。食材をどんなふうにかろうと別の食材になるわけではないが、切り方をうまく工夫した料理の方がおいしそうに見えるだろう。言葉の形を大事にすることはそれに通じるものがあると思う。

## 12. 話の展開の仕方

文章構成の形式としてもっともよく知られているのは「起承転結」だろう。周知のように、これはもともと漢詩の構成を表すものだが、小説などの物語や四コマ漫画の基本ともされている。

しかし、文章構成においてこれが唯一の形式ではない。日本では雅楽に由来するらしい「序破急」と呼ばれる形式があり、能楽、連歌などの芸術や、抜刀術、居合道などの武術においても使われるそうである。小説でも、短編では起承転結より序破急が選ばれることがある。起承転結が四段構成であるのに対し、序破急は三段構成で、急速に山場が来て、さっと終わる（と私は理解している）。ちなみに、論文も「序論」「本論」「結論」というように三段構成になることが多い。

エッセイを書く場合には、起承転結という形式にあまりこだわらず、自由に考えてよいと思う。とは言え、何らかの構成は必要であり、思いつくままを書き連ねるだけではよい文章になりにくいだろう。

小説などの物語は、起承転結の「転」や序破急の「破」というドラマチックな部分を含んでいるのがミソで、その部分における「意外性」や「危機的様相」が魅力になる。エッセイには普通そのような部分がないが、それでも一種の「山場」というか「肝」の部分がある方がメリハリのあるものになるだろう。したがって、何を「肝」にして書くかを考えることが重要になる。

ただ、エッセイの場合、「肝」の部分ドラマのクライマックスのように終わり近くに置かなくてもよいと思う。比較的冒頭に近いところでも、真ん中あたりでも、末尾付近でもかまわないだろう。エッセイでは、あとになるほどだんだん話が盛り上がっていくような流れになるとは限らないからである。

なお、経験上、あるテーマに関わるエピソードをいくつかつないでみると、文章がまとまりやすいと思う。エッセイは比較的短いので、取り上げるエピソードは三つくらいが適度だろう。

ところで、どんな文章でも、それがよくまとまったものになるにはテーマの一貫性が必要である。しかし、たくさんの学生に文章の書き方を指導した経験からしても、自分自身で文章を書いた経験を振り返っても、書き手は一貫性のあるつもりで書いているが、第三者から見るとそうになっていないということがけっこうある。「提示されているいくつかの要素は、無関係ではないが相互のつながりが緩い」「始めの部分と後の部分が内容的にずれている」という文章をときどき目にする。あるいは、自分でも書いてしまう。そうなるのは、自分の書いた文章が案外自分では見えにくいからである。

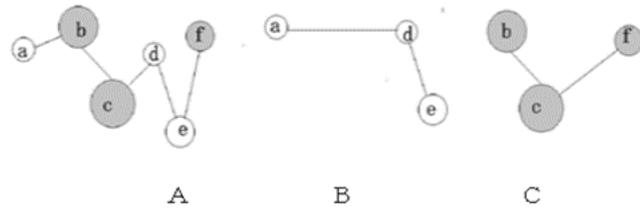
思いつくまま書いていくだけだと、知らず知らずのうちに内容がずれ、結局のところ何を言いたいかわからない文章になってしまうおそれがある。「わからない」のは、まず読み手にとってであるが、時には書き手自身にとっても「わからない」ことがある。そうなるのを避けるには、全体を貫くテーマは何かを絶えず意識しながら書かなければならない。そのテーマ自体が文章上にはっきりと（たとえば「この文章のテーマは〇〇である」などと）書かれるとは限らないので、自分がテーマだと考えていることや、「私は要するに何が言いたいのか」をメモに書き出し、それとずれていないか時々チェックするのがよい。これは文章の字数が多い少ないにかかわらないことである。

### 13. 文章の要素と配列 — 料理にたとえて

自戒を込めてのことだが、一つの文章にいろいろな要素を詰め込みすぎないのがよいと思う。要素がたくさんあると一見内容豊富に見えるかもしれないが、全体のまとまりが悪くなって論旨がぼやけ、文章全体の質が下がってしまうおそれがあるからである。

だいたい前のことだが、ある学術雑誌に論文を投稿したところ不採択になった（つまり掲載してもらえなかった）。その審査結果を受け取った時は悔しかったが、あとでよく考えてみて、不採択は当然だと理解できた。私は複数のことをまぜこぜにし、あたかも一つのことのように

書いていたのだった。その後あれこれ考え直し、不採択になったものをベースに論文を二つ書いて投稿したところ、両方とも採択された。いったん「不合格」になったおかげで、最終的にはより多くの成果が得られたわけである。



詰め込み過ぎて失敗することは、エッセイの場合でもあり得ると思う。この問題を料理にたとえれば次のように言えるかもしれない。

欲張ってうどんに「油揚げ」も「天ぷら」も「生卵」も「鴨肉」も入れると、一見豪華そうだが「何うどん」なのかがわからなくなる。それよりも「キツネうどん」「天ぷらうどん」「月見うどん」「鴨なんぼん」などに分けた方が、豊富なメニューを提供でき、それぞれのメニューはまとまりがよくなるだろう。

以上のことは右のように図示できる。A は要素を詰め込みすぎた文章である。この中身を「灰色部分」と「白色部分」に分けて別々にする方がすっきりまとまるかもしれない (B、C)。そして、B、C をそれぞれ少しずつ膨らませれば、文章が二つできあがる可能性がある。

文章における要素の配列という問題を料理にたとえてもう一つ。文章を構成する要素は同じでも、それをどう配列するかによって文章のよしあしは左右される。それは、同じ食材でも盛りつけ方によって料理のよしあしが変わるのと似ているだろう。

たとえば、W…X…Y…Z という配列を Y…X…W…Z と変えることで、話の流れがスムーズになる (あるいは、わかりやすくなる) かもしれない。

以下に、文の配列を変えてみた例を二つ示す。ただし、どちらの配列がよいかは前後の文との関係にもよるので、一概には言えない面がある。なお、修正点がわかりやすいよう、文ごとに行を変えた。また、移動した部分に下線を引いた。

アイデアを生み出す方法として「ブレイン・ストーミング」というものがあり、これは文章に何を書くかを考える際にも使える。

要するに、まずは思いつくことを思いつくままどんどん書き出してゆき、最終的にそれをまとめる方法である。

↓

アイデアを生み出す方法として「ブレイン・ストーミング」というものがある。

これは要するに、まずは思いつくことを思いつくままどんどん書き出してゆき、最終的にそれをまとめる方法であり、文章に何を書くかを考える際にも使える。

書き手が自分の経験を書くとき、書き手と読み手の間には大きな溝がある。

書き手と読み手は別々の「地平」に立っているとも言える。

書き手にとって、これから書こうとするのは「自分はすでに知っている」ことだが、読み手

の方は、これから読もうとする文章の中身を「何一つ知らない」からである。

↓

書き手が自分の経験を書くとき、書き手と読み手の間には大きな溝がある。

書き手にとって、これから書こうとするのは「自分はすでに知っている」ことだが、読み手の方は、これから読もうとする文章の中身を「自分は何一つ知らない」。このように、書き手と読み手は別々の「地平」に立っている。

最近はいよいよの人が WORD などのワープロソフトで文章を書くので、ある文章や段落を別の場所に移して配列を変えることはわりあい簡単にできる。そのような試行錯誤をしてみることで、文や段落の配列についてのセンスが身につくと思う。また、配列を変えることで印象が変わるのを楽しめるかもしれない。それは、できた料理をどう盛りつけようかと考える楽しみに似ているのではなかろうか。

なお、上に示したのは前後の文章を入れ替える程度の微修正だが、時には全体構成を大きく変えた方がよい場合がある。このような時は、8 節で触れたように「せっかくできたものを壊したくない」という心理が働きがちになるが、腹をくくって文章の再構成を試みるのがよいと思う。

#### 14. エッセイの一例

ここで、私が以前あるところに書いたエッセイを示す。模範例にはほど遠いが、自分ではわりあい気に入っているので、例として示すことにした。

### カミナリ、石うす、よだかの星 — 心的リアリティということ

私は海辺の小さな集落で生まれ育ちました。四、五歳ごろのことだったと思います。あるとき、漁師たちが大きな空のドラム缶（漁船の燃料である重油を入れるもの）をゴロゴロ転がしているのを見ました。その大きな音がカミナリそっくりに聞こえたので、私はそれ以来、カミナリのゴロゴロは雲の上で鬼がドラム缶を転がす音なのだと思い込みました。鬼がドラム缶を転がして大音響を立てているというイメージは幼い私にとって強いリアリティが感じられたのです。

小一の時だったと思います。ある昔話を絵本で読みました。もしかしたら、授業中にテレビで見たのかもしれませんが。題名もストーリーもよくおぼえていないのですが、それはまわすと塩が出てくる石うすの話で、石うすは最後に海に沈んでしまうのです。でも、その後ずっと（そして今でも）それは海の底でまわり続けていて、だから海の水は塩辛いのだ — という話でした。

海の底に石うすがあって、今でも塩を出しながらまわり続けているというイメージに、小一の私はとてもリアリティを感じました。田舎育ちの私にとって石うすは身近な生活道具でもあ

りました。そのこともあってか、いつも見慣れている海の、その底で、本当に石うすがまわっているような気がしたのです。その話は海水が塩辛い理由を説明するものとしても説得力があるように思えました。

中一のと、国語の教科書に宮沢賢治の『よだかの星』が載っていました。有名な物語なのであらずは省略しますが、ラストシーンが印象的でした。ほかの鳥たちにいじめられたよだかが、星の世界まで行こうと、空をどこまでも高くあがっていきます。そして、力が尽きて意識がなくなる直前、自分のからだに燃えて光っているのを見ます。こうしてよだかは青く燃える星になるのですが、物語は次の言葉で終わっていました。

いまでもまだ燃えています。

この言葉を目にしたとき、私は夜になったら実際に空を見て確かめてみたい衝動のようなものを覚えました。今なお、よだかの星は燃え続けている — そのイメージに確かなリアリティを感じたのです。

上で紹介した私の経験は、まあ、たあいもないものでしょう。雲の上でドラム缶を転がす鬼も、海の底で塩を出し続ける石うすも、夜空で青く光るよだかの星も、もちろん現実ではありません。でも、当時の私にとってそれらはみな実在感に満ちたものだったのです。

物理的には存在していないものを感じる実在感を「心的リアリティ」と言います。そんなものを感じるというのは「心」というものの不思議さです。私たちは物理的-客観的な世界と心理的-主観的な世界という二重の世界を生きていると言えるでしょう。心的リアリティは、私たちの心を豊かにもし、苦しめもします。私たちが喜んだり悲しんだりするのは心理的-主観的な世界においてであり、心的リアリティは私たちが「生きている」ことに深くかかわっているのです。

ところで、今の私はカミナリの音を聞いても「雲の上で鬼がドラム缶を転がしている」とは思いませんし、「海の底で塩を生み出す石うすが今もまわり続けている」とは信じていません。でも、夜空のどこかでよだかの星がほんとうに青く燃え続けているのではないか — そんな気が今でも少しするのです。

上の文章のテーマは「心的リアリティ」である。そして、その概念を説明するだけでなく、私自身の経験を具体的に紹介しつつ述べている。

はじめに、私自身の経験として「四、五歳ごろ」「小一の時」「中一の時」の三つのエピソードを紹介している。その上で、これら三つが心的リアリティに関わるものであることを述べ、この概念の意味と、心的リアリティがわれわれにとってどんな意味を持つかについて説明している。このエッセイでいちばん言いたい部分（肝）はここである。なお、三つのエピソード、テーマ、タイトルの際にずれはない（と、書き手である私は思っている）。

しかし、文章はここで終わっていない。心的リアリティの説明に続いて、その具体的エピソードの一つにあげた「よだかの星」のことが、今なお私の中で心的リアリティを完全には失わずにいることが述べられている。これが「締めくくり」であり、落語で言う「オチ」にあたる。その部分がなくとも、心的リアリティの説明としては成り立つので、その前のところで終わったとしてもテーマ上は尻切れトンボ（未完成）にはならない。しかし、ちょっと物足りない感じを与えるのではないかと思う。

だから、最後の部分はテーマに照らして必要不可欠なのではなく、文章に味付けをする、あるいは見栄えをよくするという意味あいを持っている。つまり、文章の味や見栄えがよくなるかどうかは、最後の部分に左右されることがあるわけである。場合によって、最後の言葉は決めゼリフのようなものにもなるだろう。あるいは読後感に影響するかもしれない。

いずれにしても、エッセイは書き出しより終わりが難しい、とはいつも思うことである。

## 15. 文章上達法のいくつか

文章上達法の一つは文章を繰り返し推敲することである。その際、説明不足に気づいて言葉をつけ足すことはもちろんあるが、言葉を削ることもけっこう多い。なぜなら、われわれには余分な言葉を書き足す傾向があるからである。たとえば「宍道湖の夕日は美しい」で十分なのに「宍道湖の夕日はとても美しい」と書いたりする。自分の書いた文章をよく読み直してみると、文章のあちこちに不必要な言葉がくっついていることがしばしばある。文章というものは冗長になりやすい。贅肉を落としてスリムにすべきは、からだも文章も同じだと思う。

文章上達法としてあげたい二つ目は、「八百字以内」「四ページ以内」など字数制限を設けて書いてみることである。制限字数内に収めるには、何を残し、何を削るかを考えなければならぬ。それによって、必要度が高いものと低いものを区別するセンスが養われる。また、上で述べたように、文章の贅肉をそぎ、冗長さを減らすトレーニングにもなるだろう。

三つ目は、文章が一通り書けたら、いくつかの部分に分け、それぞれに小見出しをつけてみることである。それによって、各部分に何が書いてあるかを改めて見直すことができる。ぴったりくる小見出しが見つからない場合は、その部分の論旨が不明確か、まとまりが悪いかのいずれかだろう。また、小見出しを通して眺めれば、話の流れがうまくいっているかどうか分かる。この方法は、自分の書いたものを漫然と読み直すよりも、自分の文章の問題点を見つけやすくする。4節で述べたのは、文章を書いている最中にそれを客観視することについてだったが、小見出しをつけることは、書いた後で文章を客観視するのに役立つ。なお、小見出しをつけるのは文章を見直すためなので、完成原稿ではもちろん削除して構わない。

最後にもう一つ。これはちょっと骨が折れることかもしれないので強くお勧めはしないが、実践すれば効果があると思う。その方法とは、自分の文章の要約を書いてみることである。要約は、段落程度のまとまりごとに、あるいは起承転結の構成ならそれぞれの部分ごとに、とい

うように分けて書くのがよい。もとの内容を的確かつ手短にまとめた要約が書きにくいなら、もとの文章は明確さやまとまりの点で難があると考えられる。また、要約をつないでみると、話の流れがうまくいっているかどうかもありやすい。それゆえこの方法は、先に述べた小見出しをつける方法とともに、文章のよしあしを自己診断するのに役立つはずである。

## 16. おわりに

以前には、数ある動物の中で人間だけが言葉を持つと信じられていた。しかしその後、ほかの動物にも言葉とみなせる高度なコミュニケーション能力を有するものがあると分かってきた。たとえば、イルカや、ある種の鳥である。それらは「文」（複数の「単語」が連なってできるもの）と呼んでよい内容まで伝え合っているらしい。たとえば、人間語に訳せば「近くに敵がいるぞ。危ないから逃げろ」などである。しかし、それらの言葉はすべて「音声言語（話し言葉）」である。だから、「書き言葉」などというものを有するのはわれわれ人間だけだと胸を張って(?)言える。そうであるなら、言葉を「書く」ことに時間やエネルギーをたっぷり費やしてもよいのではないか。それは人間だけが享受できる「ぜいたく」なのだから。